１０年目の「ジャーナリストスクール」を振り返って
～池上先生へインタビュー～

2022/8/11

記者）10年やってきて、スクールに参加している子どもたちの変化は感じますか？

池上）一段と新聞の出来がよくなっていると思います。いろんな人からいい発言を引き出したり、たとえばエゴマの背を切るという作業をやってみて大変だったり、馬に乗ってみたらという体験談もしっかりしていましたよね。

記者）改めて、ジャーナリストスクールの意義についてお話しいただけますか。

池上）２つあると思います。ひとつは子どもたちがあの時本当に小さくて、何があったのかを認識できなかった。そういう子どもたちに福島で取材をしてもらうことを通じて、当時のことを知ること。あるいは、その後復興のためにいろんなところで頑張っている人たちがいるということを、人に伝えようと、人に伝えるための新聞をつくることによってとっても理解できるわけですよね。それを理解してもらうということがひとつ。そしてこうやって新聞を出すと、県外に避難している人たちに送り届けられるわけで、そうするとああ故郷でこんなに頑張っている人たちもいるんだなという励ましの意味も出てくるのかなと。そのふたつの意味があるなと思っています。

記者）地方と中央で震災のニュースの伝えられ方は違っていると思いますが、池上先生はどう感じておられますか。

池上）大きな震災があると風化というか、記憶が薄れていくということはやっぱりありますよね。阪神淡路大震災のことをいまどれだけの人が知っているのだろうかという。そのときになると、そのときだけニュースになるけど、ということがありますよね。
広島・長崎のことを広島・長崎の人は知っているけど、広島から他の県に行った途端、広島のことをみんなが知らないで愕然とするという。そういうことはあるわけだし。福島から他の県外に行った時に、福島のことを全然知らないことがあり、風評被害を真に受けている人がいてしまうというのは、しょうがないという言い方はよくないのですが、時が経つとそういうものなのですね。だからこそ、そのときどうやって伝承していくのかが問われるのだろうと思いますよね。
広島・長崎でも、被爆者が少なくなりました。いま被爆体験を話せる人は、実は被爆した時に５・６歳なのです。ほとんど実体験がないのですね。だから飛ばされたらしいとか、その後周りの大人がこんなことを言っていたということをまるで自分の被爆体験のように語るという状態になってきている。
結果的に語り部を一生懸命養成していくようになります。いずれ福島においても震災体験を伝える語り部というのを中学生・高校生から養成していく、いずれそういう時代が間もなくくるだろう、それに備えたほうがいいだろうと思いますね。

記者）池上先生の考える理想的な伝承の仕方は、ありますか。震災はもちろんですし、いわき市でも2019年に大雨の被害がありました。

池上）震災遺構だと思いますよ。震災遺構を見ると、学校の鉄柱がひん曲がっているわけでしょう。津波の水かさが増しただけで全く違う、津波ってこんな威力があるんだとみてもらうことが一番ですよね。見える化がしていないと、どこかにそれがないと、結局伝承というのは難しいのですよね。
阪神淡路大震災も、実はすっかり復興してしまって、街の中心部本当に酷い被害が起きたところに、何も残っていないですよ。神戸港のところはいろんな亀裂が走ったり、桟橋の辺りが盛り上がったりというところをわざと残していますけど、それくらいなんですよね。結局街を復興させるということが最優先されてしまった結果、伝承ができなくなってくる。
ここではああいう震災遺構というもの、そもそも伝承館ってできたわけですし、そこにとにかく福島の子どもたちにちゃんと知ってもらい、それを他の県内の人に知ってもらう力をつけるということ。それを地道にやっていくということが必要なことになるんじゃないかなって思いますよね。
3.11に登校なんていうのはあるんですか？ 広島は8月6日、長崎は9日、夏休み中ですけどみんな登校するんですよ。学校に出て、原爆が落ちた時刻にみんな黙祷するんですよ。それを毎年毎年やっているからこそ伝わる。3月11日というと春休みですか、卒業式シーズンになるんだけど。

記者）ちょうど中学校の卒業式、ちょうど震災の年は卒業式だったんですね。

池上）3.11を忘れないという、全県の学校においては特別のことをやるっていう、そういうことが必要になってくるかなと思いますね。

記者）伝承していくということなのですが、語り部の方、特別な活動の場に行ったりしなくても、家庭の中で伝えていくということもあると思うのですが。

池上）非常に難しいのは、親は、3.11を経験しているわけですよね。つい、周りの若い人も知っているという勘違いが起きるんですね。それがあるところひょんなことで、えっ3.11何が起きたのか知らないの、最近の若者はけしからん、みたいな話になっちゃう。そうじゃなく、知らないんだから意識的に伝えていかければいけない。なんとなく現代史もそうなんですけど、自分が知っていると他の人もみんな知っていると思い込んでしまって、わざわざ自分からは伝えないということが起きてるんですよね。
たとえばあの時に、お前がお腹にいる時にお母さんはこうやって逃げて、なんとか命拾いしたからあなたが生まれたのよ、という話だったり。あるいは、本当に幼い子どもを連れてこんなふうに苦労したのよ、ということを意識的に語っていくだけでも随分違いますよね。そういうことをずっと親から聞いていれば、伝承館があるなら行ってみようかなとなりますよね。
広島長崎に行っても、たとえば親戚の被爆者が亡くなっちゃって、子どもの頃は興味関心がなかったけど、あの時話を聞いていればよかったのにと悔やんでいる人、今回もいましたよね。ぜひ、そうやって何が起きたのかということをつないでいくということをやってほしいと思いますね。

研究員）関連して、広島にも平和記念資料館があると思います。福島にも東日本大震災・原子力災害伝承館ができました。施設に期待したいことがあれば教えてください。

池上）おこがましいことはなかなか言えないんですけど、まずは何が起きたのか、ということを伝えるのは当たり前のことですよね。その上で、たとえば君があの時そこにいたら、大きな揺れが起きた後、どうしたのかなって自分で考えてみるようなね。たとえば津波が来るよといったときに、君はたとえばここにいた時はどうなのか、と。
最近、高校の公共で、ハザードマップなんかでね、地図の中でここにいた時に、大きな津波が来ると言った時に、考えさせるような教材が出てきていたりするんですね。車椅子に乗ったおばあちゃんを押していたら地震があって津波が来る。さあおばあちゃんとどこに逃げたらいいのか。すぐ近くに高いところはあるけど階段しかないんだ、車椅子のおばあちゃんを連れてあがることはできない、じゃああなたはどうするのと、考えようと。何が起きたのかを知った上で、最後にじゃあ、あなたはもしここにいたらどうしましたか、と。たとえばですけど地図の中で、もしここにいたらどうしましたか、どういう行動を取りましたかと、車で避難しようとして車で流されました、とか、このときに裏山に駆け登って助かりました、とか。それぞれのところで考えさせた上で、実際はこうでしたとやると、自分で考えることになるのかなって思いますけどね。

研究員）東工大でリベラルアーツセンターを立ち上げる時のきっかけが福島だったと拝読しまして、いま実践されている中で、伝承館でも県外の学生、福島出身ではない若者たちや研究者の卵たちにも、たくさん福島にフィールドとしてきてほしいし、自分の研究成果だったり、これから自分の研究や働く時の大事な教訓にしてほしいなと我々も思っていて。いま東京で学ぼうとしている学生だったり社会人のみなさんに、福島から今伝えられることだったり、こういうことをもっと福島から発信してくれたらいいんじゃないかというお考えがあれば伺いたいです。

池上）難しいですね。でも一番の問題は処理水ですよね。処理水の排水で風評被害になってと、いよいよ沖合に処理水を流すという工事が始まるというときに、たとえば完全に全部除去できていないじゃないかというけども、韓国だって中国だって原発から出しているでしょうとつい言いたくなるんだけど、あんまりそういうことを言ったって単に国際関係が悪くなってもいけないしなという思いの中で、処理水の排水をどう考えるのかということ。どう発信していったらいいかというのは難しいんですけどね。福島の原発私も何回も行っていますけど、タンクがどんどんできて、まわりの木を全部切り倒してしまって、早晩無理が来るというのはわかっているわけですからね。そういう状態をどう考えるのか、それぞれの自分の問題として考えてほしいということを、どう発信していいか、私も悩むんですけど、それが大きな課題だとは思います。

記者）理屈はわかるけども、風評、自分達の力ではどうしようもなくなるんだということがある。そこで堂々めぐりの議論になってしまう。地方紙は限られたエリアの中での発信になってしまうのですが、定点観測的な新聞記事が増えていくのかなと感じています。

池上）日本って昔から安全・安心って言うんだけど、安全だって頭でわかっていたって安心できないってあるわけね。
東京五輪を安全安心にやるって言った、「安全」と「安心」何が違うんだよってなると。
かつての狂牛病と言われたBSEについて。プリオンがあるかどうか全頭検査をすると言って、プリオンって小さなまだ子どもの牛についてはプリオン出ないんですね、できてないんですね。そんなの検査しても意味ないんですよ。科学的には意味がないって言うんだけど、みんな安心できない。だから全頭検査をと言って、莫大な金を、無駄金を使いましたよね。出ないことがわかっていても、みんなに安心してもらうために全頭検査を延々とやってきて、みんながすっかり忘れた頃に全頭検査をやめるってなったときには、全頭検査をやるべきだって大騒ぎをしていた人たちがすっかり忘れて何にも言わなくなって全頭検査しないで済むようになった。
安全安心って言うと処理水も安全だよってわかっても、安心できないと言う。安全と安心というのが、科学的には安全でも心理的には安心できないというところをどうしていくのか。どちらかというと理系の人は安全だそれじゃいいじゃないかとなるんだけど、文系の人はいやいや安心できないと。安全と安心の対立。あるいはそれは文系と理系の対立になってしまっているというのがあって。
というのもあって私は東工大で理系の学生に文系の人たちの気持ちも分かった上で、さあどうコミュニケーションを作るって話をしているんですけどね。文系と理系があまりに分断されてしまって。まったくコミュニケーションを取れないというのが非常に大きな問題だと思いますけどね。だから、科学者たちに言わせればあれだけやっていれば問題ないよ安全だよというんだけど、文系の人たちはいやいや安心できないと。日本社会の分断をどうするのか、と頭痛めているんですけどね。今回もそう言った問題が出たなと思っていますけどね。

記者）科学的に考える訓練をしていないからでしょうか。

池上）そうだと思いますよ。あるいは早い段階で分けちゃう。私の頃は高校三年でわけましたけど、いま進学校なんて高校１年くらいで文系と理系ですっかりわけちゃったりして。数学がなにもできない、微分積分ができない、物事を論理的に考えると言う訓練をしないままっていう形になっちゃってると思いますよね。だから早稲田の政治経済学部が数学を必修にしましたけどね、あれも数学Iなんですよ、数学IIやⅢじゃないんですよ。物事を論理的に考えていくという力をもっともっとつけていかないとと思いますけどね。

研究員）次の世代に関わる先生とかには、分断しないような学びを子どもたちに与えてほしいとか、分断しないようなコミュニケーション力を身につけてほしいと期待されますか？

池上）小学校教育課程に行く先生たち、大体文系なんだよね。小学校でも教科別をもっと増やそうという話がありますよね。中学校だとそれぞれ教科別の担任、先生になりますけど、小学校も少しずつしていこうと、理科なり数学、算数、そういったことをちゃんとやってほしいと思いますけどね。

研究員）今回の記事でも数字で、５トンの生産量を見込んでいますとか、２分で港から着くんですとか、ファクトをもとにした記述があると読者としても説得力を感じますね。

池上）サッカーコート何個ぶんとかあると、イメージわきますよね。